

鄧散木年譜

佐藤 亙

< 序 >

鄧散木(1898-1963)(名は「士傑」、「散木」は晩年の代表的な号)は、篆刻でその名を日本に知られ、三長両短斎(別号多数)と書斎を号した。散木自ら、三長は「印・詩・書」、両短は「詞・画」と称した。「北の齊白石、南の鄧散木」と称され、書家・篆刻家としては名高いが、日中共に三長のうちの「詩」にはほとんど目を向けていない。この「鄧散木年譜」は、拙論「鄧散木考察—その生涯と詩—」(佛教大学通信教育課程卒業論文)に付した資料であり、散木が「誰と交流したか」、又「どのように人生を過ごしたか」を確認するために作成した。作成時に使用した資料は、『鄧散木伝』およびその附录二「鄧散木简历」(散木自身が1963年に書いたもの)、『鄧散木书画集』、『篆刻学—鄧散木のすべて[改訂版]』、『鄧散木印集』及びインターネットである。尚、鄧散木の生涯を次のように、第一期1898-1936、第二期1937-1946、第三期1947-1955、第四期1955-1963、没後1963-2003に分けた。

< 年 譜 >

第一期

1898 戊戌 1歳 光緒二十四年

十月十六日(旧暦九月二日)、上海に生れる。幼名は菊初。原籍は、福建とも江蘇嘉定ともいうが定説がない。家譜の「鄧氏宗氏图」でも「无法稽查」となっているという。

1905 乙巳 8歳 光緒三十一年

一月三日、張建権(妻)上海に生れる。

1908 戊申 11歳 光緒三四年

英国人経営の華童公学(愛而近路と克南海路の交差点の近くにあった)に入学。学名は鄧鉄。

1909 己酉 12歳 宣統一年

年度末テストで学年一位となり、商品として『資治通鑑』他をもらう。

1913 癸丑 16歳 民国二年

英国人教師の自作英作文に対する懷疑と、反論した事に対する平手打ち等に抗議して華童公学を自主退学する。(『邓散木传』には、「年方十五的邓铁“永别了华童”,也“永别”了学校」という。)

1916(或1917) 丙辰(丁巳) 19(20)歳 民国五年(六年)

江蘇常熟出身で、文武両道の韓不同に武術を習う(散木本人が、この頃の事は不確実で1916年か1917年としている。又、散木は華甲の思い出話で、「人生最初の転機で、韓不同老師との出会いは、とても深い印象があった。」と話していた)。浙江の名僧で、梅の絵と詩詞に巧みであった志圓法師と知己となり、指導を受ける。上海会審公廨(後、上海臨時法院に改めらる)に入り、文書事務を扱う。

1917 丁巳 20歳 民国六年

初夏、張鈞臣(書法篆刻家)より、吳咨(吳聖俞、篆刻家)の『適園印印』を授けられる。

1918 戊午 21歳 民国七年

散木の芸術上の著作第一冊目となる『漫漫齋印存』を編み、自序を記す。「漫漫」は、屈原の『離騷』「路漫漫其修遠兮、吾将上下而求索」から取ったもので、その後の芸術上の探索と追求の姿勢を表したものであった。

1919 己未 22歳 民国八年

『友声』の第一集第一号に「潤例」を発表する(この頃、書と印を求めに来る人が多かった。潤例(揮毫料)で得たお金は、ほとんど酒樓に投げ捨て、李白の「天生我材必有用、千金散尽還復来」を地でやっていた)。同十月、父鄧策の影響で、孫中山を崇拜し三民主義の忠実な信徒となる。

1920 庚申 23歳 民国九年

『中華美術』(後、『中華美術報』に改む)に篆刻作品を寄稿する。同誌編集者の周湘に才華を認められ、「中国之美術」を五、六期に発表する。

1921 辛酉 24歳 民国十年

三月二十七日、周湘の返信で、「白文印はパツとしない」と評される。この頃、「寒夜悲笳」という、数千字の小説を書いた。

1922 壬戌 25歳 民国十一年

三月、『市場公報』第一期「哀挽号」を発刊し(1921年秋に創設)、自ら総編集となり、「游魂」の名で社説を書いた。龔自珍の精彩を放つ句を集め『衲龔集』を作成した。

1924 甲子 27歳 民国十三年

「書刻約言」を書く。海寧路と北西藏路の交差点近くに「南離公学」を創設し(全校で十数名の教師がいた)、自ら校長となり書法を教授した。校務を主宰する一方、同年の好友黄其劉の紹介で、「上海華安合群保寿股份有限公司」に文書科科員として招聘され勤務した。胡葉農、金肇祥等数名の友人と杭州旅行をする。華安公司入社後、国民党に参加する。

1925 乙丑 28歳 民国十四年

この年の名字公開化により、「龔翁」(龔の由来は、『荀子』「彊國篇第十六」の「堂上不糞、則郊草不瞻曠芸」からである。龔は、払う。不潔な物を払い除く意)「海上逐臭之夫」と号し、居所を「厠簡樓」と称して銅牌を門前に掛けた。龔翁の名は、この時が初出。この年の冬、南離公学の校長室で張建樞と出会う。

1926 丙寅 29歳 民国十五年

四月十八日、南離公学において、同校教師の張建樞と結婚式を挙げる。派克路に転居する。

1927 丁卯 30歳 民国十六年

友人王介文の獄中死で、国民党を正式離脱する。王二南を知る。(王二南は、杭州の宿儒で学問深遠。散木は密友陳紫荷の紹介で忘年の交わりを結ぶ。王二南の孫娘王映霞は、郁達夫に嫁している。この

時、王二南は杭州より上海に来て、郁達夫の家に住んでいた。)会審公廨が臨時法院に改められる。

1928 戊辰 31歳 民国十七年

江蘇常熟の趙古泥と蕭蛻庵を訪ねて弟子入りする(趙古泥に篆刻を蕭蛻庵に書法を習った)。

1929 己巳 32歳 民国十八年

王二南の「寝餘集詩」に題す。

1930 庚午 33歳 民国十九年

三月に、白文巨印「頼心雲」を刻し、弟子の頼心雲に渡した(この印は、散木の得意の作)。五月九日、頼心雲が家に来て、母親が病死したと言う。五月十一日、弟子の梅生が、昨日頼心雲が突然死亡したと報告に来た。六月十九日、援助金二千余元を各方面から集め、頼心雲の妻子の為に銀行に預金し、利息で当面の生活を可能にしてやる。

1931 辛未 34歳 民国二十年

一月十九日、最初の子供が生れる。長女で名を家育という。上海の覚林で個展を開く。浙江省定海県の普陀に遊ぶ。八月二十二日出版の『草野』に、「関于郁達夫」が掲載された。(この頃、郁家と鄧家の往来は甚だ密で、月に三度は食事をし、散木、王二南、達夫は常に酒を飲んでいた。)

1932 壬申 35歳 民国二十一年

一月二十、二十一日の新聞で、「日本人从(縦)火三友社、大鬧引翔郷」「引翔日人擾事」「日四軍艦来滬」を知る。二月三日、陳望道と魯迅、茅盾、葉聖陶等四十二人の連名で発表された「上海文化界告世界書」を読み、友人と日本軍暴行への抗議と十九路軍への支援を決意。旧正月の五日夜、会社の董事会より三百元の出資と、軍需品を十九路軍に送るよう委託され、数名で送り届けた。二月下旬から三月中旬頃、部隊が上海地図を急に必要としてしていると知り、李天行とトレーシングペーパーで詳細に作成し部隊に届けた。又、この時期に公司以、救国募金活動を発起した。友人の紹介で、国民党新編八六師団の孫師団長と会う。三月中旬頃か、以前書いていた『寒夜悲筵』を書くか、投筆して従軍するか迷う。祖母亡くなる(時期不明)。三月二十七日、

「忍死須臾」大印を刻す。同日、李天行、火雪明(江南文丐と称され、『草野』の編者)、楊達邦等十余人が鄧家に集い時政を評し、政府を痛斥した(この集会中に午前中に刻した大印を回覧し、称賛される)。三月下旬頃か、著名な音楽家劉天華の為に、一幅の長聯を書いた。又、女流画家で好友の顧青瑶の為に画賛を書く。四月初、「忍死須臾」巨印上に側款を「一二八是奇痛、是奇耻、両崑崙、今安在、忍死須臾、矢誓東海」と刻した。これを新聞紙上に載せ、友人と同胞達に自分の抗日への堅強な決意を表明した。『華安合群保寿公司二十周年紀念刊』を主編した。十一月二十日、麗雲坊六〇号に移居する。

1933 癸酉 36歳 民国二十二年

前年末に沈軼劉、施叔範、火雪明並びに詩画僧石瓢等十数人を招待し、家で議事を開き、明末の東林、復社の先例に模して社団を組織し、社会に向けて呼び掛けるべしとしたのを受け、一月初め南市の老城皇廟で社団の名を「哭社」と命名した(哭社は、毎月一回集い、課題や集会の後、作品を収集し印刷して本に纏め、社友と社会に配布した。約五年間続き、当初十数人だった会員も百余人になった)。師の趙古泥(1874-1933)が肝炎を患って逝去す、60才。五月八日杭州、浙東に遊ぶ。五月、南離公学が経済危機となり、公学で第一回書刻展を行い眼前の危機を回避する。六月二十三日、公学にて第二回書刻展を開く。七月二日、二回の書刻展で得たお金で賞品を購入し、学業優秀学生と成績突出の教員に授与する。五、六月頃、華安保寿公司の宣伝誌『華安』の児童特集号の編集を担当し、「前奏」を書く。十二月二十四日、懋益里に引越す。

1934 甲戌 37歳 民国二十三年

一月十九日(「邓散木简历」では、1933年)、次女小小狗生れる(鄧家では、長女を小狗、次女を小小狗と呼んでいた)。四月初、「東南交通周覧」活動(浙江省の建設庁が、浙江の経済発展を鼓励するために企画したコンクールで、書法、絵画、詩文、撮影作品の分野が有り、事前審査に合格すると、無料で観光ができ、後日正式に作品を応募する)に、沈軼劉、呂夢蕉と応募し合格して半月有余の浙東一帯の観光をする。七月二十一日、沈軼劉、散木等の詩作が新聞に載り、併せて

沈軼劉の優勝、散木が準優勝、呂夢蕉が三位との通知を受けた(散木の応募詩は「括蒼江行」「方岩散記(共五首)」「蘭溪風雪中渡江訪橫山」「双龍洞」「自青田至永嘉江行」「雁蕩山歌」「剪刀峰」「龍湫」「大荆石門潭」「雨夜自三江口拿舟発臨海」「石門洞瀑布歌」等)。八月二十三日、三人は賞金を三百、二百、百元と分け、お客を多数招いて大宴会をやる。八月二十六日、鄧家に後年『辞海』の編集委員をした鄒夢禪を招いた(この時、哭社社員十数名も同席)。十一月九日から十一日まで、湖社(上海)を借りて第三回個展を催す。十一月十日、湖社の個展二日目に、上海政法学院院長の孤桐こと章士釗と知り合う。十一月十四日か十五日、章士釗から毛筆の手紙と詩一首が送られる。この頃、紹興出身の浙江省文史研究館館員で書法家の徐生翁の書法に佩服する。(大体、1934年か35年頃のこと、徐の「天然去雕飾」の天真さを好む。)

1935 乙亥 38歳 民国二十四年

四月二十一日、杭州に遊び、郁達夫と会飲し頗る酔う。八月十七日、次女小小夭折する。十月十日、郁達夫夫婦と葉秋原夫人が飲みに来る(この頃の郁達夫は、最後の小説『出奔』を書いている時だった)。十二月三十一日から翌年一月五日まで、白蕉と南京に遊び、併せて四回目の個展を南京の環球旅館で開催する。この期間中に、劉三と知り合う。又、徐悲鴻とも知己となる(徐悲鴻と意気投合し、酒楼に登り、国民政府の腐敗と国民党中央執行委員等を歴任し、『文化先鋒』を編集した張道藩、および南京当局を大いに批判した)。沈公璞の紹介で、国民党の要職にある梁寒操と知り合い、中山陵に三民主義の一つを刻すから準備をなさといわれる。

1936 丙子 39歳 民国二十五年

一月七日頃、徐悲鴻からの手紙で、散木を訪問したい旨を告げられ、又、印の依頼を受ける。二月二十三日から三月二十三日まで、「民生主義」を打格書写した物が、中山陵に刻された。この年の春、滬江大学の招聘に応じて書法講演をする(四月二十九日、滬江大学での授業終了後、空腹のため入った食堂で店員の応対に立腹し、ドスの利いた声で胡桃を買って来させ、五六個取り出しテーブルの角で素手で

粉々にして店員を怖がらせた。これは、韓不同の指導の賜物であった)。この頃、公司に対して詰責文を提出し、リーダーとして不正を問うた。十一月二十一日、杭州の浄慈寺の招聘に応じて数日間逗留する。十一月二十二日、一字一丈有余の「佛殿」の二文字をモップで一気呵成に書き、続いて一幅の篆書聯を書き浄慈寺に贈る。浄慈寺滞在中に、書画家の申石伽、唐雲、王小摩と詩友の呂夢蕉等と面会した。(この時期、蘇州と廬山にも遊ぶか。)十二月二十六日、三女家俊生れる。十二月二十八日、父鄧策病にて逝去(鄧策は、依然として同盟会の老会員で、孫中山の忠実な信徒だったが、三民主義に対して日々失望し、疑念と動揺が生じ、ついに酒色に溺れた。鄧策には五男二女が有り、散木は長男)。

第二期

1937 丁丑 40歳 民国二十六年

一月十八日、華安公司の同僚二十五名くらいと大鴻運酒家に集合し、公司との交渉のための会議を開く。一月三十一日、大雪の中、父鄧策の葬儀が、百七十名以上の参列者を得て荘重に執り行われた。この頃、妻建権が大病する。三月、浙江蕭山、金華、義烏に遊ぶ。四月十一日、二階の窓から垂らしても余る長さの一幅の「二丈正聯」を書く。四月十三日、短銃を持った三人組の盗賊に入られ、「パーカーの万年筆一本、人民元約四百五十元、値千余金のダイヤモンド、そして、駱駝のセーター」が盗まれた。この日の散木は、二日酔いでフラフラであった。四月、杭州に至る。五月、前後して常熟、蘇州、杭州に遊ぶ。六月、寧波に遊ぶ。七月末から八月十三日の上海戦前夜まで、仏門の聖地普陀山に旅し、そこで、『篆刻学』の一部を執筆。七月三十一日、『篆刻学』「第一章」を書き終える。八月一日、「第二章」執筆開始。新聞で北平(北京)と天津を失うを知り楽しまず。八月九日、阿毛が上海より時局の緊迫を知らせに來たので、速やかに帰宅する(阿毛は、普陀山の寺院の「小香火」で和尚の紹介で家に帯同した)。八月十二日四時頃、上海で戦端が開かれたのを知る。八月十三日十時、上海港に帰着。午後、大規模な戦闘が起こる。八月十四日、新聞上で「国軍

大勝」を知り、筆端に興奮の情が溢れる書作数枚を書いた。八月十六日、「友声」旅行団が臨時救護医院と成り、即刻院牌を書し、院章を刻し、医院に持って行って文書書きの手伝いをする。八月二十三日、日本機が南京路の「大世界」等を爆撃す。危険を犯して、医院に負傷者を見舞った。八月二十七日、早朝四時過ぎに起き「時局地図」を作る。九月十二日、南京路の「友声」旅行団の第八救護院に歩いて負傷兵の慰問に訪う。十月になると、精神不安定となり、常々「倭寇」と大罵する。十一月十一日から十九日まで、「倭事紀略」三十余頁、およそ二万字余りを書く。

1938 戊寅 41歳 民国二十七年

二月末、三女の家俊の高熱下がらず。三月一日、麻疹の症状が出る。五月八日凌晨、三女家俊は三年の生涯を終える（連続して二人の娘を亡くし、散木夫婦の打撃は甚だ大きかった）。五月十六日、金祖同が散木を慰めるために、春華楼で宴会を開こうと迎えに来た。この会には、著名な文学者の阿英と画家の陳乃乾等が同席した。六月初め、土山湾華安影片会社の撮影現場を見学する。映画監督の桑弧が散木夫婦を慰めるために招いてくれたものである。七月十六日、衆人の委託を受けて「杯水書画篆刻義売展覽会縁起」を起草。七月三十日、杯水展の準備中に郭沫若の『童年時代』を読む。八月十八日、馬公愚、鄒夢禪、来楚生、唐雲、白蕉、散木が参加して、上海杯水書画篆刻義売展覽会が正式に開幕する。八月二十四日、「国際救済会」に手紙を書いて、白蕉と共に義売（チャリティーバザー）収入金三千余元を寄付する。九十月頃、杯水展終了後、単孝天に継いで葉隠谷を入室の弟子とする（この時、葉隠谷は、席を設けて散木に拝師の礼をとった）。

1939 己卯 42歳 民国二十八年

年初、華安公司当局に賃上げ要求を出す。一月二十日、退勤時に同僚の履剛等数名に「糞翁、你在公司是出了名的“出头鸟”、还是少管点闲事罢」と忠告される（この頃、散木は糞翁・老鉄と呼ばれていた）。三月十二日、単孝天と葉隠谷の治印に進境が有り非常に喜ぶ。七月七日、白蕉の書法について友人の陸淵雷への手紙で、非常に推賞すべきと書く。十一月十八日、岳母逝去。この年に、二弟の士熊

逝去。この頃、大新で個展をする。厠簡楼金石書法講座を開講する。

1940 庚申 43歳 民国二十九年

新春の初め、師生合同展の準備をする。三月二十二日から二十七日まで、大新公司(今の第一百貨公司)を借りて師生展を開催する。三月二十三日、『新聞報』に「龔翁師生書刻合展」の消息が載った。合同展が成功したので、さらに制作に励み、その合間には画竹弾琴を楽しむ、「雜題画竹」四首を連作した。春、華安公司の不当差別についての「ストライキ」が、一部同僚が勇んで宣告を早くしすぎたために失敗した。その結果、散木は目を付けられていたこともあり、公司より退職を迫られる。五月十四日、華安公司の職員が来て、「解聘状」と退職金二百七十七元を届ける。七浦路の吉祥寺を借り、唐雲、朱屺瞻、錢鑄九、来楚生、張幼樵、白蕉、吉祥寺主持、若瓢等を招いて、退職金全部を使って大宴会を行った。六月一日、イギリス人に習い、「サマータイム」を採用することに決定。六月二十三日、祖国の金石書法芸術を発揚普及させるために、広く弟子を受け入れることにし、その中に、郭若愚がいた。七月一日、散木と白蕉は書・画・印聯合展を大新公司以開いた(華安公司退職後、最初の展覧会)。七月十三日、青瑤介、黄鴻鈞夫婦がその子国瀚を弟子入りさせる。九月十七日、沈尚賢を弟子とする。十月十一日、治学治芸を万に一つも怠らぬように、散木の書室には「約言」が貼られ、「自課」を定める。十月十八日、周一蓍来たりて師礼をとる。十二月二十九日、潘曼萍来たりて師礼をとる。この年、「題蕉上坐画蘭」という詩を賦す。

1941 辛巳 44歳 民国三十年

二月二十日、単孝天、葉隱谷来たりて「高士伝」を鈴す([鈴す]とは、印を押すこと)。この年、上海の大新で個展を開く。

1942 壬午 45歳 民国三十一年

四月十八日、忘年の老友白蕉が学儀と結婚すると知らされる。四月二十日、「大吉」と「花好月圓」を両面に刻し、二人にお祝に贈る。五月八日、白蕉と学儀が上海脱摩飯店で結婚式を挙げ、散木も出席し祝う。この年、木道人(未詳)の印を刻し、詩の唱和をする。

1943 癸未 46歳 民国三十二年

二月十日、日本の文化機関から「中日文化協会」の名で、重要会議への招待状が郵送され、散木、馬公愚、白蕉が中国側の発言人とされていたので、翌日、「中日文化協会」へ参加を断固拒絶する旨の手紙を出した。(しかし、或る新聞紙上にトップニュースで、会議の様子が報じられ、席上三人が発言したとされた。)この年、周浦に遊ぶ。

1944 甲申 47歳 民国三十三年

この年、足を病む。上海寧波同郷会で個展を開く。十二月五日、友人で漢方医の師誠が故人となる。

1945 乙酉 48歳 民国三十四年

四月一日、斉児が日本の憲兵に連行される。七月三日、日本軍が降伏を乞うとの報せを聞いて「七月初三夜、聞日軍乞降訊、喜不成寝、作詩代頌」という題で、四首作った。八月十二日、日本投降の消息を聞き、「八月十一日晨、聞日本投降消息、共相慶賀、喜極欲涕、入夜不寝、枕上成句」と「征人怨」の二首を作る。秋、老友白蕉との約に依じて、杭州、蘇州、周浦に遊ぶ。九月二十九日、第四子の国治が生れる。十月八日、『海報』の編集者が来て時事詩数首を依頼される。同日、老友であり、上海愛国中学校教員であった李天行が没す。十月十日、『正言報』上に諷刺詩「国慶頌」が載る。同日、『海報』上には、一組の散曲「国慶曲」が掲載された(国民党統治期、十月十日を「国慶節」とした。いわゆる「双十節」)。この年、林羹翁という北京の人から「吾は年七十、君の年はいくつか?名が同じという事はよろしくない、幼きものが長ずるものを避けるものだ。」という内容の手紙を貰い、即刻名号を「散木」に変更した(散木の出典は、『莊子』「人間世」の「散木也、以為舟則沈、以為棺槨則速腐、以為器則速毀、以為門戸則液構、以為柱則蠹、是不才之木也」である)。

1946 丙戌 49歳 民国三十五年

二月一日、盗難に遇う。二月八日、初めて賀揚靈を識る。四月二十七日、華安公司事件は、八百万元で和解が成立する。五月、単孝天と江載曦の合同展のために、『僑声報』副刊上に紹介文を書く。五月十七日、施叔範と散木は『僑声報』の求めに応じて、叔範は「蚕箔流塵」を、

散木は、別号の山人居士で「至上小声集」を発表した。六月四日、長女家斉を連れて杭州と紹興に遊び、徐生翁を訪問した。この年、南京で白蕉と合同展を開く。この年、上海寧波の同郷会で個展をする。年末、三たび浦東と杭州等に到り、農村で家を購入し蟄居する予定であったが、売り主との縁無く終わった(散木は、相当満足したようで、一ヶ月以内に代金を支払うと交渉が一旦成立したが、最終的に不成立となり、憤々として已まなかった)。年末、宋の岳飛の墓に再遊したあと家に戻り、早年郁達夫がくれた「過岳墳有感時事二首」を書いて軸に仕立てた。

第三期

1947 丁亥 50歳 民国三十六年

春節過ぎ、施叔範が友声旅行団で初めて台湾旅行を企画したと、同行を熱心に誘われ、欣然と応じる。二月十日、船旅の準備をする。二月十一日、杜門して台湾の各種資料を調べる。二月十二日、陰雨と厳寒の中、「中興丸」で生涯最長の漫遊(二週間の旅程)に出発した。四月七日、台湾旅行中の詩を修改し、意に満ちた二十余首をまとめる。(この旅で二大収穫があった。一つには、「詩情が湧出し二週間で一百余首」を得、二つには、「居住地として、理想の場所を探し当てた」。現実に引越し計画までしていた。)四月、寧波、奉化と嘉興の煙雨楼等に遊ぶ。六月、杭州に到る。九月、無錫に行く。十月、前から思っていた姑蘇に赴き、老友の沙曼翁等に会う。陰曆九月二日、家に宴席の準備をして三、四十人の客を呼び、五十の寿筵を開く。国民党の要人張道藩が組織した芸術団体への執拗な入会要請を、この日も拒絶し、使者をつまみ出したことが一因で、人事不詳になるまで泥酔した。十一月十六日、蘇州の蕭退闇の家に見舞いに行く。その機会に、紹興の書法家徐生翁から送られた五言小対を持参して教えを乞う。蕭退闇は、散木の眼前で範を示し、書き終わると親しく記念にと、篆分四冊と湖筆四本を贈った。この頃か、若年に日本を訪問したことのある書法家楊草聖と出会い、大きく視野が広がる。

1948 戊子 51歳 民国三十七年

台湾への移住計画を実行する資金を得るために、この年、連続して二回個展を開く。しかし、翌年、上海が解放され、台湾移住計画は沙汰止みになった(『邓散木传』には、「就在一九四八年、他一连办了两次个展。但因国民党反动势力江河日下、不久、钟山风雨起苍黄、百万雄师过大江、上海迎来了解放。于是、我们的迁居计划、也自然地宣告终结了。」という)。無錫、杭州、青浦に遊ぶ。無錫で白蕉と合同展を開く。

1949 己丑 52歳 民国三十八年

四月、国民政府台湾に移る。五月二十七日、白蕉と合作で『鋼筆字範』を出版。同日、人民解放軍上海を解放。この年、青浦、蘇州に遊ぶ。十月一日、中華人民共和国成立、毛沢東が主席となる。

1950 庚寅 53歳

六月、懋益里の住戸福利会が組織される。十月、民盟(中国民主同盟)に加入。年末、「上海文聯土改工作団」に第三隊の学習組長として参加して紹興に行き、前後四十余日間、土地改革に参加。(『邓散木传』に拠る。同書付録「邓散木简历」は、51年のこととして、「11月去绍兴道墟土改40天」という。)
「土改工作」終了後、四万余字の「農村雜記」を『亦報』に連載した。

1951 辛卯 54歳

四女国治が和安小学に入学。

1952 壬辰 55歳

三月か四月のこと、お金に困窮し、蔵書や新聞二百余斤を売る。又、映画監督の桑弧から、人民元で一百万元を借りる。四月に、「五反検査隊」四中隊五分隊の工作に参加。六月、文芸整風に参加。

1953 癸巳 56歳

この頃、人民政府が何回か就業の機会を提供したが、自分は芸で家族を養えとし、生活の更に困難な人が就業すべきだと断った。(当時、全国人民代表大会常務委員会委員等の役職にあった章士釗への詩の中では、「塵羹塗飯吾能慣、未費公家薄俸錢」と窮状を伝えている。)

1954 甲午 57歳

一月二十五日、新成区の人民代表に当選する。八月十四日、陳毅上海市長から数方(方は印の量詞)の名印の治刻を依頼される。八月十五日、早朝に起きて数度補刀(印の修正)を行う。八月十七日、補刀完了し完成する。八月十六日から二十一日まで、新成区人民代表として、美祺大戲院で第一回上海人民代表大会に参加列席する。

1955 乙未 58歳

この頃、数名の友人と語らって、補習学校を一校立ち上げる予定だったが、教師の質と経費の問題で、直ちには何も進展しなかった。この年に、四女国治は育才学校(陶行知が四川で創設した学校で、抗日戦勝利後に上海に移った)に合格する。五月、四弟の士勲が江西で自殺する。

第四期

1955 乙未 58歳

九月十六日、北京人民教育出版社の招聘に応じて北上する。北上決意と共に補習学校の件は、自然と沙汰止みになる。北京では、復興門近くの邱祖胡同に入って住む。九月十六日頃、「聞雁」二首を作る。北京移住後間もなく、画家の馬万里(別名馬瑞図)と識り合う(馬万里と張大千、徐悲鴻の交流は深く、三人で「歳寒三友」図を合作した事もある)。間もなく、万里は広西の桂林に赴任することになり、散木に葡萄の画一幅を贈り、散木は名印一方を贈って作品交換をし、以後書信の往来は絶えなかった。十月一日、古書画鑑賞家の徐邦達が来宅、十七年前の事を互いに述懐する。同日晚、徐邦達は散木を連れて天安門、長安街のにぎわいを鑑賞させた。この時から、『京華新詠』と『京華続詠』を作り始める。

1956 丙申 59歳

この年、四女国治が北京三十四中に入學。真武廟に遷居する。十一月、書刻芸術の同行者が立志し「篆刻部」を組織した。散木は求めに応じて「发扬和巩固中国书法艺术实施计划草案」と「中国金石篆刻研究社组织缘起」を起草した。

1957 丁酉 60歳

一月二十日、奔走して「北京書法研究社」(別名、北京書法篆刻部)を成立させる。この頃、散木と白蕉は逆境の中でも書簡の往来は絶えず、同病相憐れんでいた。一月二十九日、『自伝』を書く。これは、散木を専業の書法家として国務院に報告するので、簡単な履歴を書くようにという人民教育出版社の求めに応じたものであった。一月三十一日、「決して日に必らず詩有り、日に必らず為す所有り、荒るる事勿れ怠る事勿れ。」と、自らを鼓舞するために書き、これより『京華新詠』(八十六首)の後を継いで、『京華統詠』(百八首、1958年に完成)を作り始める。二月二十七日、書法研究社で「時人書法展」「明清書法展」を開催する事になり、北京の数社の新聞記者を招待する。春、「時人書法展」に弟子の単孝天を推賞する(単孝天は、「中華人民共和國憲法」と「実践論」を細楷で出品する)。三月三日、「時人展」が始まり、鑑賞者が雲集した。次いで、「明清書法展」の準備に入り、散木は、作品の釈文等を担当した。三月、整風運動が展開され、右派のレッテルをはられる。日本の書道代表团が北京を訪問、書法研究社の展覧を見る。散木は、中国の書法芸術及びその歴史について説明した。四月十四日、「明清書法展」が開幕。北京書法研究社副主席の張伯駒の社務報告の後、散木が「書法の演變及び今後の方向を談ず」の講演をした。この頃、「時人展」で三首を作る。四月二十一日、六十名を越す専門家と学者が中山公園に集い、徳望を以って謝無量(人民大学教授で『中国大文学史』等の著者)が「北京韻文学研究会」の主席に選ばれ、散木は推されて秘書主任になる。北海の時人展と明清展の後、北京市政治協商會議が中山公園で開いた文化界人士の座談会で、散木は文化部副部長の鄭振鐸に「書刻芸術を救え」という提案をするが、しだいに慷慨激昂し、言辞激烈で周囲の師友を心配させる(散木は、共産党や人民政府に対して「一点も疑いの念は無く」、自分の建議は何の問題も無いと考えていた)。四月二十八日、「日々必ず為す所有り」の計画に基づき、香港の『大公報』に「芸林談往」を連載する。この時期に、老友の沈尹默、沈軼劉、沈禹鍾や新たな知己で中央文史館館員の陳雲誥が、散木の六十を賀して詩を贈って来た。六月十八日晚、毛沢東の「关于正确处理人民内部矛盾的问题」をラジオで

聞き、「书法篆刻是否孤儿？救救书法篆刻艺术」という文書を民盟に寄せる。十一月四日、上海の老友白蕉に長文の手紙を書き、前条の件について詳細に説明し、「戴帽」(右派のレッテルを貼られたこと)についても経過を書いている。十二月二十七日、家斉夫婦は、内地の経済建設支援のために雲南に行く。この年に、自分の生涯を概括して総括し、「六十自訟」詩八首を作る。

1958 戊戌 61歳

三月、民盟支部より支部大会開催と召集通知を受ける。三月十九日、支部大会で内部嚴重警告処分となり、併せて「好好改造、争取摘帽、回到人民队伍中来」と申し渡される。三月二十一日、落ちこんでいる時に著名な文学家の曹聚仁の訪問を受け、近況等を話す。曹聚仁は、宿泊先の新僑飯店へ散木を連れて行き、茅台酒を一瓶買い、「苦中に楽しみを作す」と飲み終ると、崇文門の店で水餃子を食べ、曹のカメラで記念写真を二枚写した。別れ際に「散木兄，好自珍重!」と諭される(散木の死後、曹聚仁は香港の『文匯報』に「悼念鄧散木先生」を載せる)。三月二十九日、精神的打撃を受けた後、足と胃を病んで医者に行きかけたが、章士釗(新中国成立後、政務院法制委員会委員等を歴任)の家へ行き、「戴帽」の経過と「内心の苦痛」を話す(章士釗も、この時、やり切れない状況であった)。四月一日、痛みに我慢ならず夫婦で人民病院へ行くが、先払いで十数元するためにレントゲンが写せず、漢方医の「胃潰瘍なら手術の必要は無い」との説明に薬を調合してもらうだけで帰った。この後、胃の痛みにもかかわらず、怠らずに『荀子』の訳注や『説文部首』の詮釈等の文章を書く。五月二十六日、師の蕭退闇卒す。この年の八月八日から十二月二十一日まで、四ヶ月と十三日(『邓散木传』の原文では「凡五个月又十三天」という。)をかけて安陽残石と漢碑を臨書する。十二月二十九日、臨書した漢碑三十三種を自ら五大冊に仕立てる。

1959 己亥 62歳

十二月三十日、六弟の士煦が故人となる。

1960 庚子 63歳

元旦、足の激痛が長い間止まらなかった。一月三日、依然痛みが続

き、深夜ですら一時間も寝れない日が連続する。以後、漢方医にかかる。春節前後、壁の電気時計を合わせ、イスから落ちる。二月二十五日、「书法史编写提纲」を白蕉に書き送り、専著にする予定だった。端午節前、激痛と瘤から膿が出始めた事で人事不省になり、北京大学病院に行くが診断結果は「血管堵塞症」で、残念ながら漢方医と漢方薬が更に害を大きくし、既に手遅れで、片足の切断を要すると言われる。七月十九日、二十日、意識不明となり醒めず。七月二十一日、北京大学病院に送られ、十二病房二三〇号室に入院する(七月二十一日から八月二日まで)。八月九日、北京大学病院十二病房二二二号室に再入院(八月九、十日の日記は、国治が代筆する)。八月十日午後一時、左足を鋸で切断する。痛みが解消し、睡眠も良好となる。八月二十四日、病床で気分も良くなり鉛筆で日記帳に七絶一首を書いたが、病床での文字なので判読が困難であった。左足を切断してからは、名を「一足」「夔」(中国神話伝説中に有る一足の雷神で、その声は雷霆の如く、その光は月の如くと言われている)と変えた。三回目の改名である。十月十五日、左足切断後は順調に恢復し、長期間離れている上海に帰ろうとする。十月二十六日、漸く杖を手で使用して歩けるようになる。一連の災難を経験し、充実した人生と書刻芸術の追求のために、新たな気持ちで筆と刀を持つ事にする。散木の病氣入院時に、母が逝去する。散木の代わりに翻訳家で親友の馮亦代が全ての面倒を見る(散木夫婦にとって、生涯忘れる事が出来ない事であった)。

1961 辛丑 64歳

足を切断して間もなく、右手首に傷を受け筆を握れず刀も握れなくなった(医者に診てもらったが、治療の効果は無かった)。初秋、この頃の家計は火の車で、経済的にきわめて困難な時期であったが、国治が北京師範学院中文系に合格する。十一月十九日、北京書法研究社副主席の張伯駒が訪れ、共に酒を飲む。吉林省博物館の第一副館長として迎えられるので、一緒に行かないかと誘われる。

1962 壬寅 65歳

春、気分の良い時はしばしば陶然亭を訪れた。初夏の頃、妻張建権は

懷柔県での労働奉仕として、当地人民公社の落花生収穫の手伝いに参加する(この頃、右派とされた影響で収入がほとんどなく困窮を極めた。夫に精力を付けさせることもままならず、建権は収穫した落花生をくすねて散木に食べさせた)。九月二十二日、胃潰瘍で再度北京大学病院に搬送される。九月二十四日、前日区党委の劉書記が「摘帽」が決定したことを家に知らせに来たと、妻建権が病床の散木に告げる。これを知り、大いに精神が振った散木は、即刻手紙用品を買って来させ、馮亦代、白蕉、桑弧、唐雲そして親族等に手紙を書く。又「戴帽」の期間には改名して投稿していたが、これも終了した。(この頃、馮亦代が、右派の「帽子」と左足切断の苦痛に同情して、民盟中央副主席、中国文字改革委員会副主任、中国語言学会顧問等を歴任した胡愈之に散木の命乞いの手紙を書いた。これが大きな力を持った。)十月十一日、医師から明日手術をすると通知され、散木は承知した(妻建権は二度と酒を飲まないと誓わせた)。十月十二日、胃の三分の二を取り除く手術をし成功する。十月二十二日、退院許可が出るか医者に聞いてくれと催促する。医者は散木の本当の病名は「癌」だと告知した。十月二十六日、退院。退院時、医師の請求金額は三百八十九元八分であった。鄧家の全所持金と家畜の貯金を合わせても数十元不足した(十年の動乱の洗礼を受け、大量の書画や収蔵品を失い、更に晩年は、政治上の差別を倍して受け、生活上の保証は何も無かった)。退院後、毎日牛乳に替えて豆乳を飲ませており、鄧家の白糖は全部豆乳に代わってしまった。どうしようもなくなり、建権と四女国治は、豆乳のための購入証の数字を書き換えて発覚する。しかし、散木が妻に自首するように勧めたため、大事に至らなかった。この頃、単孝天と楊達邦の二弟子が、散木の晩年の金石作品中より一百余印を精選し、『一足印稿』を限定五十部作成し売り出す。病院費用の支払いに困窮している時に、以前、香港の出版社から出した『中小学字帖』の原稿料数百元と『一足印稿』の売り上げ金が手に入り、散木と建権は、関係者に感謝し喜んだ。十二月十八日、弟子の沈尚賢が散木の状況を知り日本から手紙を寄越し、安否を問う。同日午後、建権に対して、胃の手術時麻酔が全く効かず、医師の一刀一

刀が全てが分かっていたと話して聞かせる。永年にわたる過度の飲酒のせいであった。

1963 癸卯 66歳

一月九日、「邓散木正式摘去右派分子帽子」の通知を受け取る。この頃、既に癌は肝臓に転移していた。新春、白蕉が上海から、病中の莫逆の友散木を見舞いに北京まで来る。一月二十九日、白蕉と郭晴湖と相約して三人で茅台酒を一本飲む。白蕉は、上海に戻るまでの前後十三日間を、始終散木と「共飯与同榻」する。二月四日朝、三十年以上の友白蕉と訣別した。二月十三日、『怎样临帖』を書く。三月二十日、五体で「正気歌」(南宋の文天祥の作)を書く。四月十九日、『部首新詮』の編纂作業を開始する。五月一日、五一国際労働節(メーデー)のこの日、和平画店門市部で個展を催す。不自由な身体をもって展覽会場に行き、笑顔で気持ち良さそうにしていた。最後の書刻展となったが成績が良く、大情熱を以って「厖大な計画」を継続すると決意する。この年、「蒋善国」というペンネームで「什么是真书」「什么是行书」「什么是草书」「谈谈汉字学」等の多数の文章を『文字改革』誌に発表する。五月十二日、家斉は雲南から転じて上海へ行く。六月三日、「字帖编写计划」を制定。六月四日、さらに「书法故事写作计划」を加える。六月十二日、民盟主席の沈鈞儒のために、挽聯を多数書く。六月十九日、曹雪芹展覽会の為に「特大说明」を五時間費やして書いたが、出来が悪いので、七月四日、書き直す。七月から八月にかけて、空き時間を利用して数十名の来訪者と陸続と会見した。会見者には、解放軍の高級将校から、省委書記、大学生から中学生までいた。この間、ずっと熱を出し、しばしば血を吐いた。ある日、章士釗から毛主席のために字を書いてほしいと依頼があり、散木は、病体を押して打格して四体の「毛主席詩詞」を書いた。その後、さらに自作詩も書くように勧められ、これを書き終えると突然立てなくなり、吐血して暈倒した。九月初、散木は依然として仕事を輟めなかった。九月十五日、青島の弟子蘇白が手紙を寄越して師の安否を問うてきた。この手紙の直後、馮亦代が茅台酒一瓶を携えて来訪。兩人対酌し、最後の会飲をする。この後、『書譜』の訳を開始する。九月二十

四日、数十年にわたって書き続けた日記に終止符が打たれる。最後の日記は「下午郑、杨二医来诊并针、稍可。」である。この後間もなく、四回目の入院で北京大学病院に搬送されるが、散木は昏睡状態のままであった。十月八日午後五時、薬石効無く病膏肓に入り、静かに呼吸を停止する。この年に『欧阳结体三十六法诠释』と『草书写法』が出版された。

没後

1965 乙巳

『四体简化字谱』が出版される。

1968 戊申

散木が死亡して五年後、長女家斉も末期肝硬変で、文革の動乱中に三十九才で死去。

1979 己未

『篆刻学』『五体书正气歌』が出版される。四女国治の年表に「右派冤案平反改正」とある。

1980 庚申

八月、北京中央美術館で「鄧散木金石書法展」が開催される。中央テレビ局が「鄧散木の書法藝術」という番組を制作する。『散木书陶诗』出版。「鄧散木金石書法展」が、天津、杭州、青島の各地を巡回する。

1981 辛酉

二月、『篆刻学』が『篆刻の歴史と技法』と改名されて日本で翻訳出版される(昭和五十六年、木耳社刊、高畑常信訳)。五月、『鄧散木印譜』が日本で刊行される(昭和五十六年、書学院出版部刊、北川博邦編)。六月、『篆刻學』が日本で翻訳出版される(昭和五十六年、東方書店刊、北川博邦、佐野光一、養毛政雄、佐野榮輝、須田義樹訳)。

1983 癸亥

十一月、張建権は、散木が残した書法篆刻作品と遺品二千余点を黒龍江省へ寄贈する。十一月六日、張建権と黒龍江省書画院は、鄧散木の芸術遺作陳列について協議する。十一月十五日午後、北京政協礼堂で贈呈式が挙行政され、趙樸初、舒同、啓功、李可染、胡絜青、李万

春、廖静文等が出席する。十二月、百花文艺出版社より『邓散木诗选』が国治の整理で出版。

1984 甲子

鄧散木芸術陳列館の人員を五名とする。

1985 乙丑

十一月、黒龍江省文物管理委員会は、黒龍江省文物博物館関係の文物鑑定専門家、学者と散木の弟子葉隠谷(のち逝去)、郭若愚、そして鄧散木芸術陳列館準備グループの人々を組織して、収蔵方法、研究、整理等に関して、遺作品の実際に基づいて十一類に分ける。

1986 丙寅

九月六日、鄧散木芸術陳列館が正式に開館する(黒龍江省は、1983年から1986年にかけて二十万元を投資)。開幕式には、黒龍江省省長陳雷、副省長陳雲林、徐悲鴻紀念館館長廖静文、副館長徐慶平、全国各省市の書法篆刻芸術界の専門家、及び散木の弟子等数百人が参加。十月三十日、『篆刻學』改訂版第二刷発行(昭和六十一年、東方書店刊、北川博邦、佐野光一、養毛政雄、佐野榮輝、須田義樹訳)。

1988 戊辰

黒龍江省政府と国家文物局が共同で三百万元を出資し、1904年に建てられたバロック式建築で、哈爾浜市の一類保護建築に指定されている館を修繕。

1989 丁卯

「鄧散木生誕九十周年紀念鄧散木金石書法展」が上海で開催される。

1991 辛未

五月、黒龍江省博物館の修繕竣工後、陳列館の陳列展示も面目を一新する(開館数年で、内外を含めて一百四十万人を迎えた)。

1994 甲戌

冬、上海で「鄧散木芸術研討会」が、市の関係指導者と上海の著名書画芸術家の出席で開かれる。

1996 丙子

五月、『邓散木传』が張建権の口述、謝天福、謝天祥の整理で、上海人民出版社から出版される。

1997 丁丑

黒龍江省博物館は、メンテナンス費用八百万元を投入して館を全面増築し、鄧散木芸術陳列館も元の面積に更に150平方メートル拡大し、鄭重に展示される。

1998 戊寅

北京の徐悲鴻紀念館にて、「鄧散木誕辰100周年紀念展」が開催される。哈爾浜で、「鄧散木100周年誕辰紀念会」が举行される。

1999 己卯

六月、生誕百周年紀念事業の一つとして、『鄧散木书画集』が鄧散木芸術陳列館編で、北京の文物出版社より出版される。

2000 庚辰

二月十七日付『芸術新聞』で、鄧散木芸術陳列館のリニューアルが報道される。張建権が「張建権老人的長寿之道」として、『中国老年』2000年第8期に取り上げられる。

2003 癸未

三月三十一日現在、妻張建権は九十八才にて、鄧散木芸術陳列館館長を継続中。九月十八日から十月十二日まで、何香凝美術館で「鄧散木芸術展在何香凝美術館展」が、鄧散木芸術陳列館の共催で開かれる。

< 参 考 文 献 >

- 1.『鄧散木伝』 張建権口述 謝天福、謝天祥整理 上海人民出版社 1996年
- 2.『鄧散木书画集』 高曉梅他主編 文物出版社 1999年
- 3.『篆刻學—鄧散木のすべて(改訂版)』 鄧散木著 北川博邦等訳 東方書店 昭和五十九年
- 4.『鄧散木印集』 鄧国治編 河北美術出版社 1992年
- 5.『鄧散木印譜』 鄧散木著 北川博邦編 書学院出版部 昭和五十六年
- 6.『鄧散木印譜』 北川博邦編 東京堂出版 平成元年
- 7.『上海歴史ガイドマップ』 木之内誠編著 大修館書店 2000年
- 8.『中国近现代人物名号大辞典』 陳玉堂編著 浙江古籍出版社 1999年